

記録映像から見る人と自然の関わり

中路武士

The Human and Nature Relationship in Documentary Films

NAKAI Takeshi

鹿児島大学法文学部

Faculty of Law, Economics and Humanities, Kagoshima University

要旨

奄美における人と自然の関わり、地域住民と社会の関わりはどのように記録され表象されてきたのか。地域映像アーカイブを構築して、その記録表象を分析するために、写真や映画をはじめとした地域映像を探る調査を奄美大島で実施した。また、視聴覚アーカイブ施設を利用して、公共に放送されてきた映像資料を分析することで、奄美のイメージの変化を歴史的に検証した。

研究内容

1) 地域映像の調査と考察

映画が誕生して 120 年あまり。映像は、時代を映す鏡として、世界の出来事を、人類の歴史を記録してきた。だが、映画フィルムの保存は見過ごされ、これまで多くの貴重な映像資料が失われてしまった。とくに地域映像の散逸は著しく、過去の地域の記憶を、現在から未来へと伝える障壁となっている。人と自然の関わりを知るうえで、地域住民の生活が記録されたフィルムは歴史的な文化資源としての価値を有している。それにもかかわらず、その保存活動がまだ十分に為されていない。写真や映画という「メディア環境」を保全することが求められているのだ。

そこで現在、世界や日本の各地では、大学と地域の連携のもと、映画フィルムを「文化遺産」として調査・収集し、デジタル技術によって修復・復元し、映像を保管・公開するという「地域映像アーカイブ」の動きが盛んになってきている。本研究では、鹿児島大学を拠点として、奄美群島を中心にした地域映像アーカイブを構築すべく、映像資料の調査を実施した。日本本土とは異なるヴァナキュラーな（地域固有の／口語的な）映像はきわめて興味深く、その表象を分析することで、民俗学や人類学、生物学にも寄与できる知見を得ることができると考えられる。

記録映像の保存に関しては、奄美群島広域事務組合視聴覚ライブラリーの取り組みが注目に値する。奄美群島の日本復帰に関する数多くの記録写真が網羅されて収集されており、デジタル化も済んでいる。また、奄美大島を舞台とした文化映画など、フィルムそのものの腐敗（ビネガー・シンドローム）は進んでいるものの、そのデジタル化を推進しており、地域の映像文化の活性化に寄与していることがわかる。ところが、奄美市歴史民族資料館など、祭事を中心に記録映像が保存されているものの、VHS テープからのデジタル化が進んでおらず、課題が山積している施設もある。

なお、本研究で調査したかぎりでは、鹿児島県立大島高等学校が、創立百周年記念事業（2001年）のなかで、戦中・終戦直後に米軍によって記録され、ワシントン国立公文書館に所蔵されていた奄美群島の写真と8mmフィルムの収集に成功している（図1）。

しかしながら、戦前から戦後にかけて、一般の市井の人々、地域の住民によって記録されたフィルムを、今回の調査では発見することができなかった。高温多湿による劣化のためか、遺品整理のためか、調査した多くの家庭がすでに廃棄していた。そこで本研究では、南海日日新聞やあまみエフエム、奄美図書館を利用して、フィルム提供の呼びかけを広く行い、今後の調査へとつなげた。

2) 視聴覚アーカイブ施設の調査と考察

公共放送であるNHKの視聴覚アーカイブの映像は、奄美における人と自然の関わり、地域住民と社会の関わりを知るために、たいへん重要な資料である。NHKアーカイブスを「奄美」というキーワードで検索すると、2016年現在、234本もの奄美に関する映像が保存されていることがわかる。一般に公開されている番組は少ないのですべて視聴したが、番組タイトルや番組内容の記述だけでも時系列を追って分析すると、戦後70年を通して日本本土が奄美にどのような「まなざし」を向けてきたのかがわかる。

たとえば、1950年代は「日本本土への復帰」がニュース番組で報告されるのみだが、1960年代になると奄美の「ハブ」の対策や「台風」の被害、「貧困」に苦しむ人々の姿が描かれはじめる。とくに『現代の映像 奄美からの報告』（1967年）では、ミカンコミバエの本土侵入を防ぐために敷かれていた「農作物移動禁止令」の解除を要求する島民の運動がシリアスに描出され、復帰してもなお、本土から隔離されたままの奄美の現状が表象されている。

それに対して、1970年代以降では奄美をめぐる番組数が次第に多くなるなか、『新日本紀行』シリーズが始まり、現在に至るまで「日本・ふるさと」や「伝統・伝承」というキーワードのもと、奄美の「自然の豊かさ・美しさ」が表象の中心に置かれていく。また、視覚文化においては『日曜美術館 黒潮の画譜』（1985年）で田中一村の日本画が発見され、2000年代になると聴覚文化において元ちとせや中孝介などの島唄が取り上げられる。

この経緯の分析から、奄美へのまなざしが「社会問題・自然災害を抱えた島」から「大自然に囲まれた南国特有の文化をもつ島」へと移行していると考えられる。イメージのオリエンタリズム化が引き起こされていると理解できる。

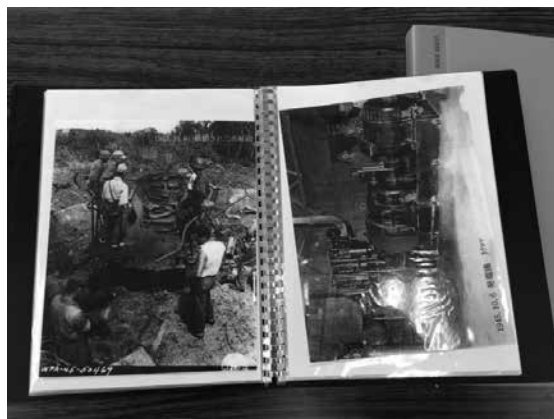


図1 大島高校に保管されている米軍による記録写真。終戦直後の様子がうかがえる。